

ひぐちアサ
講談社 アフタヌーンKC 全2巻

やさしいワタシ

やさしいとは何か。この作品を読むとそう考えさせられる。ただ他人への善意や親切だけで括られることならば、それは本当に傷ついた人の心を癒すことはできないだろう。本当のやさしさとは、何か。どうやってそんな気持ちになれるのか？

挫折した元テニス少年^{ひろたか}広隆は、サークルの先輩である^{やえ}弥恵と交際を始める。だがお互いを知るにつれて、トラウマが露わになり傷つけあうばかり。それでも広隆はなんとか弥恵の傷を癒そうとするが、その気持ちは届かず、二人の恋は弥恵の自殺という形で幕を閉じる。そして、悲嘆に暮れる広隆を待つものとは…？

本作を語る上で外せない要素がある。

それは、わかりにくさだ。セリフの意味の繋がりが不明瞭、登場人物が無駄に多くて読者をまごつかせる、おまけに展開が雑然としていて、作者も登場人物も何がしたいのかまるでわからないとくる。最初は戸惑うに違いないが、このわかりにくさは作者の意図的なもので、これは本作になんともいえない味を与えている。このわかりにくさは、加工され物語化されたエンターテインメント作品よりも、はるかに現実に近いのだ。一読しただけで意味がわかりにくいこの作品中の言葉は、ドラマを作るために洗練^{なま}された言葉には失われてしまった、生の



『味』がある。再読を重ね、わかりにくさを咀嚼したとき、心にリアルに訴えかける作品世界が目の前に開けるだろう。

これは単に楽しませることを目的に作られたエンターテインメントではない。本作は、登場人物を見降ろして物語として読むのではなく、友達から届いた手紙を読むようにじっくり味わってほしい。

きっと、やさしい気持ちになれる作品。

京都 うろつきまわりめぐ

河原町通から三条通を烏丸通の方に歩いていくと、大きな煉瓦造りの建物がいくつか目に入ってくる。その中で、赤煉瓦と白の御影石とのコントラストが一際目を引く建物がある。それが中京郵便局である。レトロな外壁とは裏腹に、ATMが並び、ごく普通の郵便局として運営されている。実は、この郵便局は「外壁保存」の日本で最初の例として、建築史的にも有名な建物なのである。

現在の中京郵便局は、明治35年、京都郵便電信局として建てられ、そのヨーロッパ風の意匠から、永らく市民に親しまれてきた。ところが、郵便事業の機械化に伴い、昭和48年全面解体・新局舎建設の計画が持ち上がった。明治近代建築の一作品として、また、他の煉瓦造り

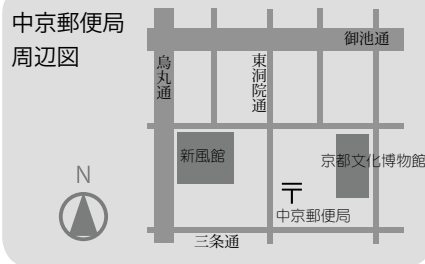


Nakagyo Post Office

の建物とともに三条の景観を形成する主要な存在として、この解体案に対して全国から保存を要求する声が上がった。そこで取られた方法が、建物の主要な外壁だけを残り、内部を新築する「ファザード保存」という手法であった。

中京郵便局の立地する三条は、東海道の終点として江戸時代から明治時代まで京都経済の中心であった。東京のように大きな震災もなく、今も金融関係の近代

中京郵便局
周辺図



建築が多く残っている。中京郵便局と並ぶ京都文化博物館は旧日本銀行京都支店である。今では烏丸の代表的スポットである新風館も、かつては大正に建てられた電話交換オペレーションセンターであった。

京都随一のオフィス街に、意外にも明治の空気を伝える建物が残っている。なにげない三条の街角にも歴史が封じ込められているようだ。(apis)

はみだし
すてーじ

天国の天使に会いました、夢で。
⇒うちには本物の天使がいますよ、しかも二人も。

(工・1 1024)